

麦をめぐる事情について

(小麦)

生産局

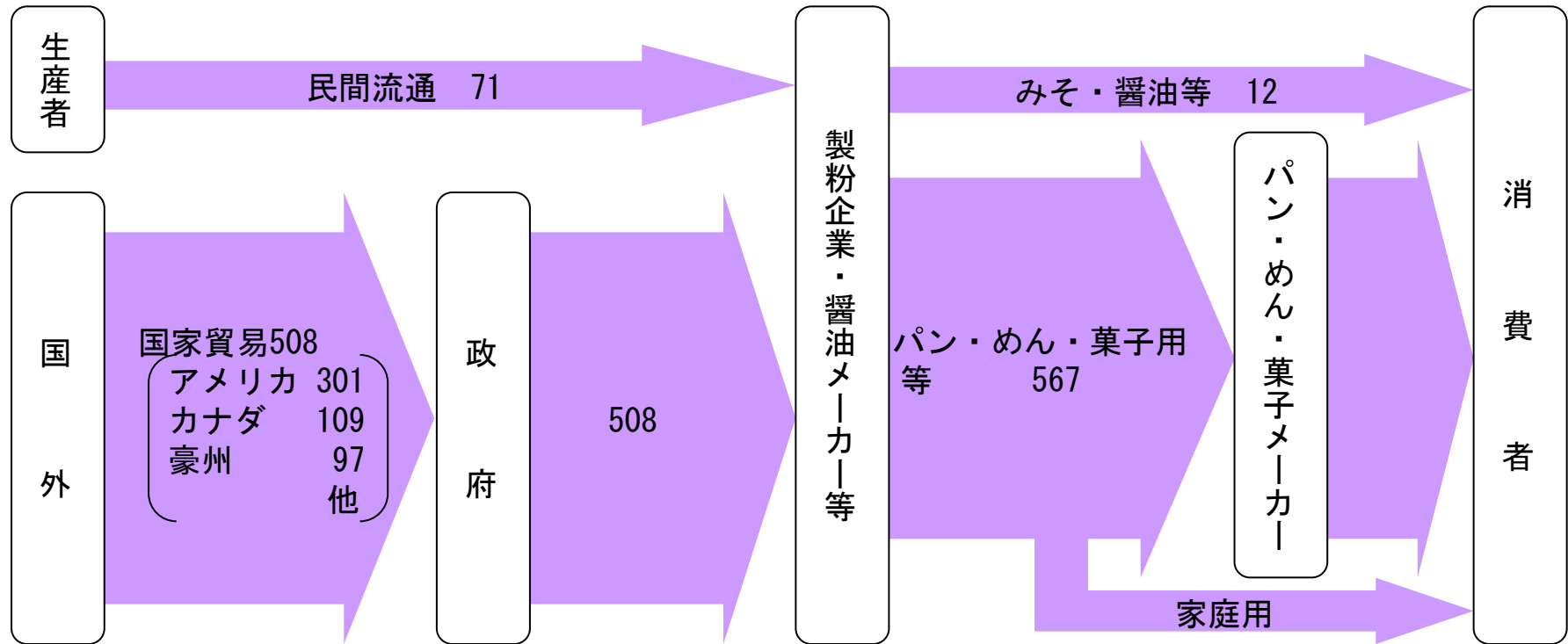
農林水産省

小麦の流通の概要

- 小麦は需要量の約9割を外国産小麦の輸入で賄っている。国内産小麦は民間流通により取引されており、外国産小麦は政府が国家貿易により一元的に輸入し、需要者に売り渡している。
- また、米とは異なり、最終的にパンやめんとして消費するために、流通過程において各種の加工工程を経ている。
- 小麦は、主に製粉企業が製粉して小麦粉にし、その小麦粉を原料として二次加工メーカーがパン・めん・菓子などを製造している。

小麦の流通の現状（食糧用）

（単位：万トン）







注 流通量は過去5年（H20～H24）の平均数量である。

小麦の種類と用途

- 原料として使用される小麦の種類は、小麦粉の種類・用途に応じて異なる。
- 小麦粉の種類はたんぱく質の量によって強力粉（パン用）、準強力粉（中華めん）、中力粉（うどん用）、薄力粉（菓子用）に分類される。

外国産小麦の銘柄	カナダ産ウェスタン・レッド・スプリング (1CW)	アメリカ産ダーク・ノーザン・スプリング (DNS)	アメリカ産ハード・レッド・ウィンター (HRW)	オーストラリア産スタンダード・ホワイト (ASW)	アメリカ産ウェスタン・ホワイト (WW)
輸入数量	87万トン	138万トン	85万トン	86万トン	78万トン

小麦粉の種類	強力粉	準強力粉	中力粉	薄力粉
主な用途	食パン 	中華めん ギョウザの皮 	うどん、即席めん ビスケット、和菓子 	カステラ、ケーキ 和菓子、天ぷら粉 ビスケット 
たんぱく質の含有量	11.5~13.0%	10.5~12.5%	7.5~10.5%	6.5~9.0%

国内産小麦の種類	パン用品種	中華めん用品種	日本めん用品種
供給量 (24年産)	6.8万トン (8.4%)	0.7万トン (0.9%)	73.8万トン (90.7%)
81.3万トン	北海道ゆめちから (0.4万トン)	福岡ちくしW2号【ラー麦】 (0.3万トン)	香川さぬきの夢 (0.4万トン)

(注) 輸入数量は、過去5年 (H20~H24年度) の平均数量である。

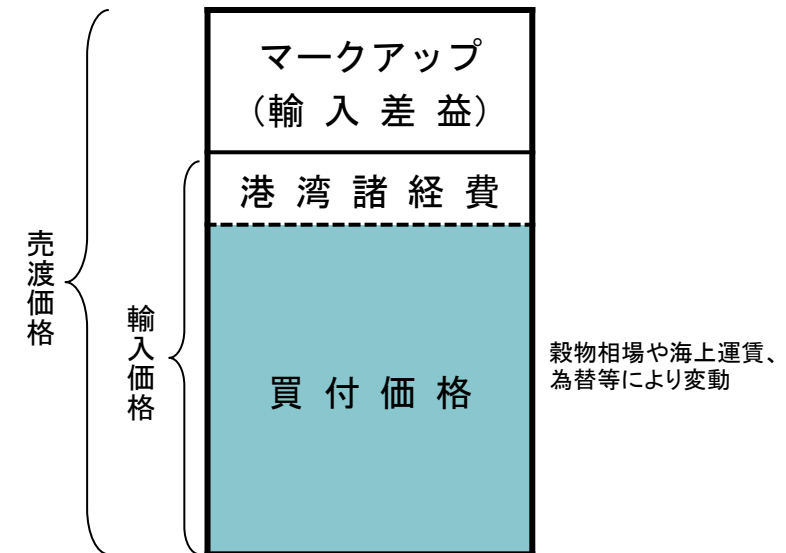
現行の輸入麦の売渡制度

- 平成19年4月から、輸入麦の政府売渡価格は過去の一定期間における輸入価格の平均値に、マークアップ（政府管理経費及び国内産麦の生産振興対策に充当）を上乗せした価格で売渡す相場連動制に移行。
- 国際相場の変動の影響を緩和するため、価格改定は現在年2回実施するとともに、過去6か月間の平均買付価格をベースに算定。
- 一部の銘柄を対象としてSBS（売買同時入札）方式を導入。

○ 相場連動制における価格改定ルール

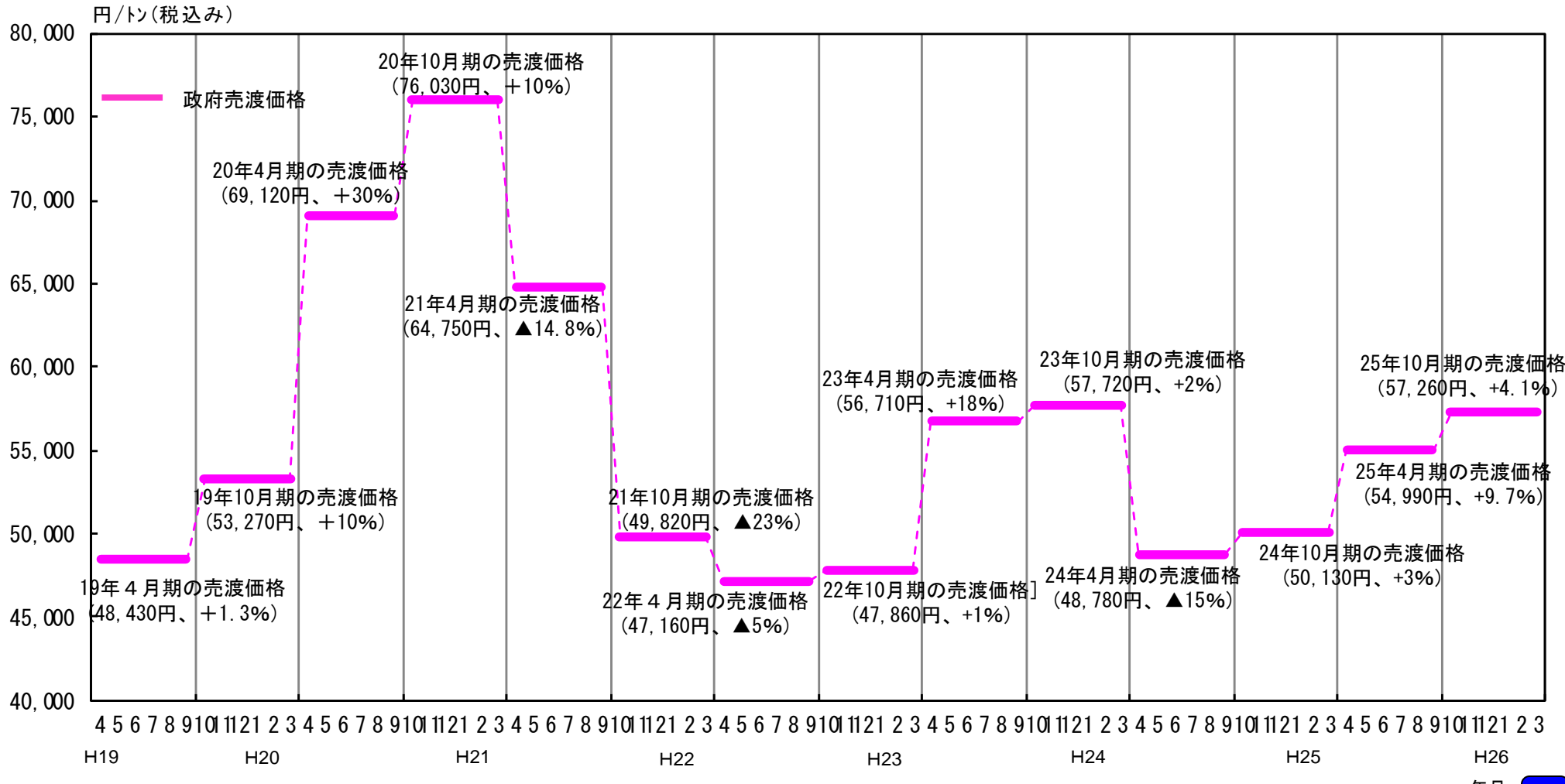
項目	基本的なルール
年間価格改定回数	現在年2回
買付価格算定時期	直近6か月間 〔概ね1か月程度の価格転嫁の準備期間を考慮して、 価格改定月の2か月前までを対象〕

○ 政府売渡価格の構成



輸入小麦の政府売渡価格の推移

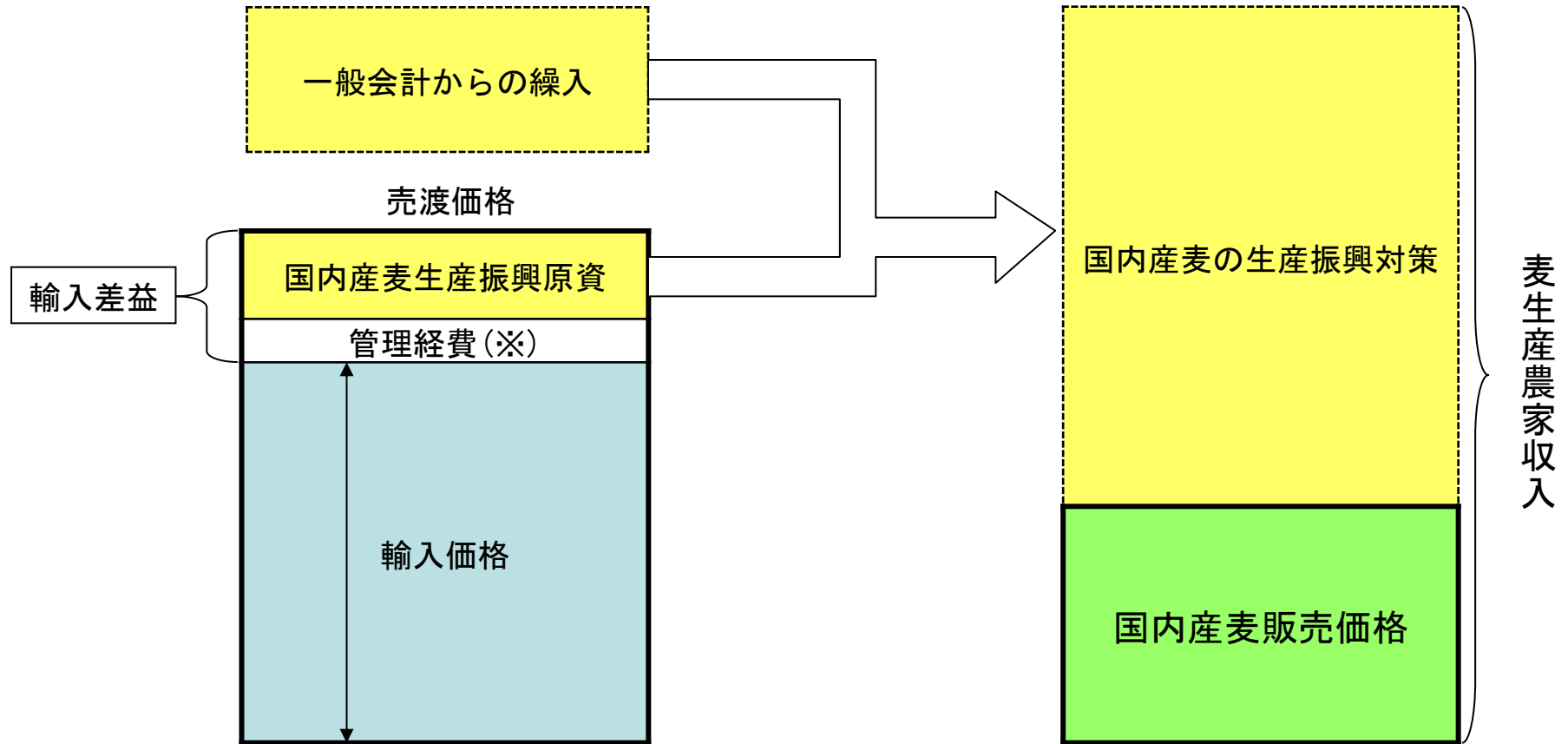
- 輸入小麦の政府売渡価格は、穀物の国際相場や、海上運賃、為替等の動向が反映された輸入価格に伴い、変動。
- 平成25年10月期（平成25年10月～平成26年3月）の輸入小麦の政府売渡価格は、輸入小麦の政府売渡価格の改定ルールに基づき、5銘柄平均で57,260円/トン（対前期比で+4.1%の引上げ）と決定。



輸入麦の輸入差益及び使用について

○ 輸入麦の輸入価格に上乘せされる輸入差益は、国内産麦の生産振興及び輸入麦の売買を行うために必要な管理経費（※）のみに充当されている。

○ 輸入差益の用途（麦管理勘定のイメージ図）



※ 輸入麦の備蓄等に要する経費。

国内産麦の取引の仕組み

- 国内産麦（約70万トン）の取引については、需要に応じた計画的生産を促進するため、収穫の前年（は種前）に生産者と需要者（製粉企業等）の間で取引数量及び取引価格について契約する民間流通を行っており、現在、国は国内産麦の買入れを行っていない。
- 取引価格については、販売予定数量の3割について入札を行い、残りの7割については入札で形成された価格を基本とする相対取引が行われている。

○ 国内産麦の民間流通（例）

<契約の流れ>

収穫前年
7月～ 生産者団体から販売予定数量、需要者団体から購入希望数量の相互提示

生産者団体と需要者の間で、は種前に契約を締結

8～9月 入札取引の実施（販売予定数量の約3割）

9月～ 相対取引の実施（販売予定数量の約7割）

<生産の流れ>

～12月 は種（秋まき。春まきは収穫年の4月）

は種前契約に基づき、計画的に作付（は種）

収穫年

麦の生育期間

6月～8月

収穫及び検査

6月～

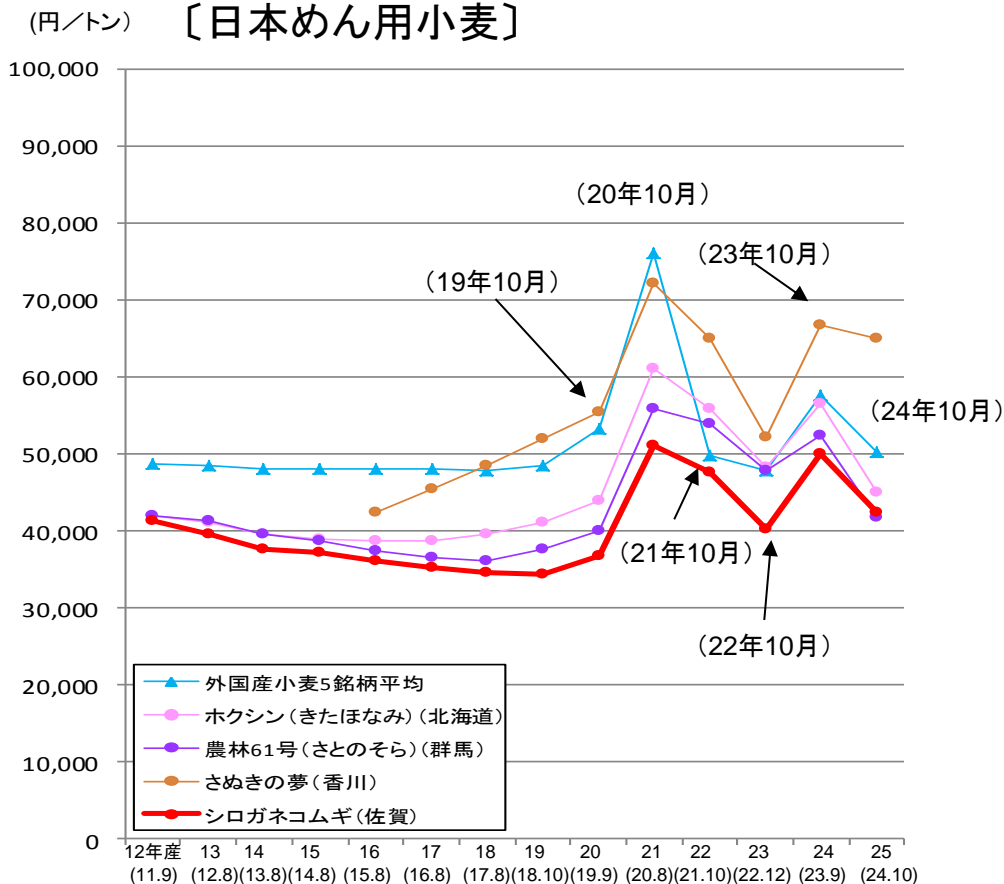
需要者へ引渡し

注：生産者団体と需要者で構成する民間流通連絡協議会において、値幅制限等の入札の仕組みが協議・決定されている。

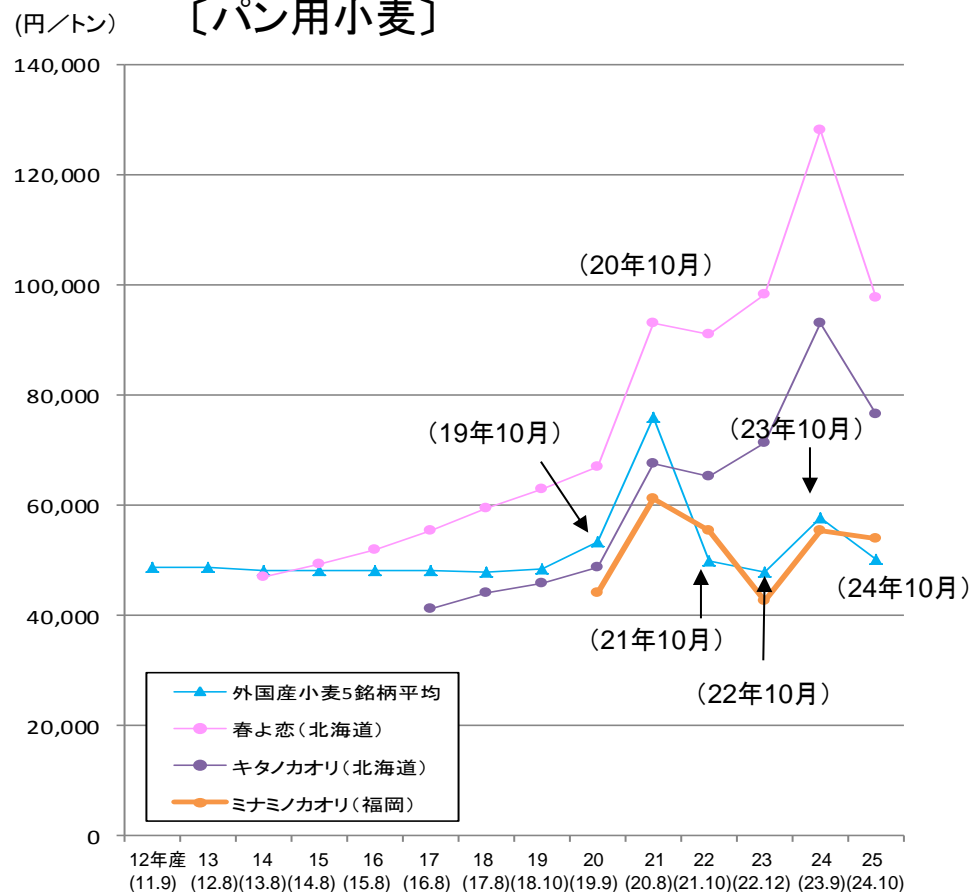
国内産小麦の主な銘柄の取引価格の推移

- 国内産小麦の主要用途である日本めん用の小麦の取引価格は、外国産麦との品質格差等を踏まえ、概ね外国産麦より低い価格で取引されている。
- 一方、パン用に開発された国内産小麦の取引価格は、生産が比較的限定的であること等を反映し、外国産麦よりも高値で取引されているものが多い。

〔日本めん用小麦〕



〔パン用小麦〕



注1：国内産小麦の価格は、は種前入札第1回、第2回及び再入札の全銘柄落札加重平均価格（税込み）。年産の下端の（ ）内は国内産麦のは種前入札実施年月である。
 注2：外国産小麦の価格は、18年度までは年度平均の実績価格であり、19年度からは、国内産麦の入札実施年月時点で公表されている輸入麦の政府売渡価格（5銘柄平均）である。
 注3：ホクシン（きたほなみ）については、22年産までは「ホクシン」の価格であり、23年産からは「きたほなみ」の価格である。
 注4：さめきの夢については、24年産までは「さめきの夢2000」の価格であり、25年産は「さめきの夢2009」の価格である。
 注5：農林61号（さとのそら）については、23年産までは「農林61号」の価格であり、24年産からは「さとのそら」の価格である。

製粉企業の状況について

- 平成23年度の製粉企業数は95社であり、10年前と比較して23社減少。
- 一方、平成23年度の小麦粉の生産量は4,899千トンであり、10年前とほぼ同じ水準である。

○業種概況

項目	H13年	H23年
企業数	118	95
工場数	147	118
従業員数(人)	3,733	3,248
生産数量(千トン)	4,909	4,899

※資料：農林水産省調べ